

# 12 の 話

（十一月）仏教書としては、空前のベストセラーを記録した『般若心経入門』（祥伝社）の著者であつた松原泰道師（一九〇七—二〇〇九）は生前、「辞書を引きながら」。

（二月）二月の立春も近くなって、少し暖かい日のことでした。

（三月）毎朝、テレビ体操をします。

松岩寺住職が令和四年四月から一年間、妙心寺派の月刊誌『花園』の巻頭ページを担当しました。十二の話を一冊にまとめました。

（七月）女子高生から聞いた、「興味深い本当のはなしです。」

（十月）大本山妙心寺は京都にあります。

（八月）鏡について書きます。

（十二月）今年のNHK大河ドラマ

は『鎌倉殿の13人』でした。

（一月）新しい年の力レンジャーを手にする  
と、真っ先にゴール  
デンウイークは何連休か。  
（九月）アイドルグループ「嵐」が出演していた  
航空会社のテレビ「マーキュリー」に、「光の道」を  
テーマにした映像がありました。

（四月）自分の思いを誰かに伝えるのは、  
それほど簡単なことではありません。

（五月）なんどなく使つていろいろ書の生い  
たちを探ると、禅の書物にたどりつく  
ものがいっぱいあります。

（六月）六月です。

## はじめに

令和四年四月から一年間、妙心寺派の月刊誌『花園』の巻頭ページを担当しました。つたない十二の原稿を一冊にまとめてお届けします。題して、『12の話』。小洒落たタイトルでしょう！「でも、どこかで見たことある」。そう思う人もおられるはず。作家・司馬遼太郎に『十六の話』というエッセイ集があります。十六を十二にして、拝借しました。

ところで、なぜ、『花園』という、乙女チックな名前の月刊誌なのか。妙心寺は花園上皇（1297～1348）が開基<sup>かいき</sup>言つてみればポンサーとなつて建てたお寺だから、そのご恩を忘れないために、妙心寺関係のものには、花園が冠せられることが多いのです。

さて、月刊『花園』です。ながい歴史があるから、執筆した方も多い。たくさんの執筆者のひとりに、昭和の名僧と慕われた山田無文元妙心寺派管長（一九〇〇～八八）がおられます。昭和二十年代後半から六年以上にわたつて『坐禅和讃講話』を執筆されています。それが一冊の本にまとまつた時、「はしがき」として次のような詩を書いておられます。

「たのしんで書きくるしんで書きよろこんで書きしかたなく書き書き去り書き去り落葉の  
ように花園にたまつた／九十八篇。／たのしんで読まれいやいや読まれ／おもしろく読まれしかた  
なく読まれ／読まれ讀まれて／枯葉のように何處かへ舞つてしまつた／九十八篇。／集められてこの  
一巻となる／おとした垢を見せられるようで／自分では見る気もしないが／誰かが読んでくれようか  
どなたかが、「宗教的天才は文学的天才をかねる」という名言を書いていたけれど、無文老師はまさしく宗教的天才であり、文学的天才です。そんな天才の文章は「枯葉のように何處かへ舞つて」はいかず、  
何十年たつても、こうして読まれるけれど、私の文なんか、今春の桜花とともに、散つてしまひます（桜  
の落花は地面に張りついて、ほうきで掃くのに苦労する）。私の12話も、わすれられないように、ご迷  
惑でも、しつこくお届けします。ご笑覧のほどを。（花岡博芳記）

# もくじ

四月	…	…	月がきれいですね	2
五月	…	…	五月雨は五月に降らない	6
六月	…	…	リアルに帰つてくる	6
七月	…	…	青春ふたたび来たらず	8
八月	…	…	秋の彼岸には	10
九月	…	…	達磨はなぜ東へ行つたか	14
十月	…	…	辞書を引きなさい	16
十一月	:		破調のひと	
十二月	:			
一月	…	…	新しいカレンダー	20
二月	…	…	鬼のひそひそ話	22
三月	:		花は合掌に開く	
				24

月刊『花園』に連載したものを、改行その他レイアウトを少し変更しています。



# 「月がきれいですね」

自分の思いを誰かに伝えるのは、それほど簡単なことではありません。たとえば、文豪の漱石に、こんな逸話が残っています。旧制高校の英語教師として赴任した夏目金之助に、学生がひやかしと興味半分で尋ねます。

「——LOVE YOJIをどう訳したらいいのでしょうか？」  
「金之助がいたえます。」

「ううだな。月がきれいですね。とでも訳しておきたまえ」

さすが、大作家の若き日の名訳です。でも、見上げた月が純粋にただただ美しいと思つただけなのに、それを口にした瞬間、——LOVE YOJIだと勘違いされても困つたことになる。

思いを言葉で伝えるのは難しいし、それを受けとめるのも容易ではありません。伝えにくい言葉といえば、仏教のはじまりを告げるあの言葉も難しい。あの言葉とは、「唯我独尊」です。

言葉の背景を復習してみましょうか。約一千五百ほど前の四月八日、現在のネパールにあるルンビニーで生誕された釈尊は、「手助けなくして四方に行かれること各七歩されて、自ら、天上天下、ただ我のみ独り尊し」。そう、仰つたという。現代語訳を、水

谷真成訳『大唐西域記』(平凡社)から引用しましたが、いくら聰明な釈尊でも、生ま  
れてすぐに歩きはしないし言葉も発しない。後の時代にできた神話です。そんな神話  
化は、釈尊ご自身にとつても迷惑な話でしょうが、現代日本では、「唯我獨尊」を、「ひ  
とりよがり」のたとえと誤解するから深刻です。このやつかいな四文字を、いかに読み  
解けば良いか。キーワードは、「独」の字です。

釈尊の生涯をみると、節目節目で「独」の字がついてきます。近年の釈尊伝研究によ  
れば、二十九歳で自らが育った王城を独り離れます。修行の師を求め集団に入ったのち、  
独りで山中にこもる。しかし、苦行は眞の道ではないのを知つて、山を出て人里に下り、  
菩提樹のもと、独り坐わり成道するのです。大事な転機では、独りになる釈尊です。  
気がついてみれば、独り感を醸し出す言葉を、仏教や禅はたくさん持っています。身  
近なのをご紹介すれば、『円覚経』に、「桂輪孤<sup>けいりんひとり</sup>碧天に朗<sup>ほが</sup>らかに」という句があります。  
「そんな文句、聞いたことない」なんて言わないでください。皆さんのが年忌法要をされ  
た時、臨済宗でよく回向文<sup>えこうもん</sup>は、この文言が結びのことばになるのですから。「天空にひ  
とり浮かぶ月のように、闇を照らす尊い存在になろう」という願いなので、まさに「唯  
我獨尊」ではないですか。

そう思ふと、釈尊の産声に託されたのは、独りの決意であり、孤独を快適に生きる宣  
言ではないだろうか。



## 挨拶

なんとなく使つてゐる言葉の生じたちを探ると、禅の書物にたどりつくのがいつぱいあります。たとえば、「挨拶」。「挨」の字も「拶」の字も「押しあつ」ことで、『碧巖録』という禅の語録には、「一挨一拶」という熟語がでてもおむ。一問一答して、相手の力量を確かめる。そんな意味がこもれてゐるよつです。

でも、なぜ「押す」ことか、現代のよいつに日常の社交儀礼を表すよつに変化したのか。語録の時代の禅僧は、出合つた瞬間に問答をして言葉をやりとりしたので、それにかい転じて、「ねはよひ」「にんにけは」など、出合ふの第一声を挨拶と言つよつになつたのでは。ところだ、人が生まれて最初にかわす挨拶は何でしょつか。あかちゃんの「おきやあ」という産声も、「さじぬまして。よろしく」といへ、挨拶ではないか。挨拶されたら、その場に居合わせた者は、こだえるのが礼儀といつむの。日本語には、やうした時に発する定番の言葉はないよひですが、英語を母国語とする人びとにば、決まつたフレーズがあるひし。何だと思いますか。"Welcome"だとひ。

生まれてきた子の肌が何色であつても、裕福な家の子であつても、貧しくても、「よひこそ、私たちの社会く」。やいへ、祝つのだねうだ。このよつた言葉の背後を知らないと、深く理解できない現代の歌があります。中島みゆき作詞作曲の『誕生』です。三十年ほ

△前に作られた歌で、今では中等・高校の国語の教科書に歌詞が収録されています。

最初に聞いた Welcome  
Remember はねじゆこむ  
思ひ出せなじだり  
わたしへつどもあなたに迎へ  
生まれてくれて Welcome

人は歳をとるかたねで、いろいろな経験を積みます。やさしくれてやけになつた時、おまえは歓迎されて生まれてきたではないか。そのことを思い出し、あの感激をふたたび我がものにできれば、犯罪などに手を染めさせしないだらう。

それいそば、禪の和讃にも次のよつたな一節があつたな。  
「衆生本来仏なり」。

白隱禅師も中島みゆきも同じ思いを伝えてくる。なんて書いたか忘れぬでしょうか。  
おひとつと、挨拶について書きながらが、ご挨拶が遅れました。四月より本欄を担  
当しておます。これまでのあいだ、おつき合いを願います。



# 五月雨は五月に降らない

六月です。梅雨時にふさわしい、有名な俳句をひとつ。

五月雨をあつめて早し最上川

もがみがわ

松尾芭蕉

梅雨だと「うのに、五月の雨とは奇妙。五月雨は現代の五月には降らないのです。そして、五月晴」という言葉もあるけれど、青葉若葉が目にしみる大空を表すのではなく、もともとは梅雨空のほんの少しの晴れ間を意味したのだそうだ。このやつかいなずれは、ご存じのとおり、俳聖が使っていた暦と、現代の暦が異なるから。

『奥の細道』の旅は、元禄二年（一六八九年）三月下旬にはじまります。これも、現代の暦に直すと五月中旬で、今の県名にすれば山形県を流れる最上川の河畔に立ったのは、新暦七月中頃になるといつ。

しかも、芭蕉は「最上川」の句をよむ前日、立石寺りつしゃくじに立ちより、「閑しづかや岩いわにしみ入いるる蝉の声」の句を作っています。

現代人が「五月」に「蝉の声」を聞いたり、ちょっと怪しい。と書いてきて、あー、面倒くさい。いちいち旧暦を新暦に変換するのも面倒だけど、これを読むのも億劫にち

がないありません。芭蕉さんの季節感を、現代にあわせる簡単便利な方法はないのでしょうか。

さて、イングのガンジス川中流域をくり返し行き来した釈尊も、川に関することばをいくつものこしています。『スタッ一パータ』と呼ばれる最も古いお経に、次のようなことばが収められています。

「河底の浅い小川の水は音を立てて流れるが、大河の水は音を立てないで静かに流れ  
る」

中村元著『ブッダのことば』(岩波文庫) の七二〇章から引用しました。もちろん、川の水にたとえて人のありさまを教えてています。釈尊みずから、引き続いて説明してくれます。

「欠けている足りないものは音を立てるが、満ち足りたものは全く静かである」

近くにいませんか。ピイチクといふやうのが。私は言葉少なく、静かな人間です（と思っている）。でも、緊張がとけると、しゃべります。それを後で思い出し、自分で自分がいやになるのがいつもです。

おだやかな気分をたもつには、静かでいること。それは、自然も同じで、今年の梅雨、日本中の河も川も、雨をあつめないと静かに流れてくれー！



# リアルに帰つてくれる

女子高生から聞いた、興味ふかい本当のはなしです。

ある年の七月十日頃のことだそうです。高校生のMさんが、東京都内のターミナル駅で友だちと待ち合わせていました。でも、友だちは約束した時間に姿をあらわしません。理由はおばあちゃんの家でお盆の手伝いを頼まれているから。ほどなくして、遅れていた友人が到着しました。そして、待っていたMさんに興奮して言いました。

「ねえねえ、お盆つづいていたゞくひなこと。おじいちゃんが帰つて来るつて、リアルに帰つて来るつてこと?」

たずねられた少女は、口どもりながらこたえました。

「ねつじつ意味じやないじやない」。

こんな時には、どう説明したらいいのでしょう。

「そもそもお盆はウラノバーーーー」といつて、もへんごくさんじや目連尊者が……」。

なんて即席の辻説法をしても聞いてはくれないだろ(う)」、

「いやー、ウラ盆はあるけれどモテ盆はありません」。

と、馳洒落でじまかすのもいかがなものか。

あるいは、ひらがなを多用し横書きで話題になつた芥川賞小説『あぶさんじ』(黒田

夏子著)の一節を借用して、

「死者が年に一度帰つてくると<sup>い</sup>ふつたえる三昼夜」。

そんな説明では、ますます混乱してしまいます。

亡き人が帰つてくるのが、リアルかどうかは別にして、お盆は定例の年中行事です。定例だから、支度をしてお迎えすることができます。招待客です。しかし、こちらの都合などおかまいなしに、アポなしでやつてくると事情は違つてきます。芝居や落語の怪談<sup>はなし</sup>は、突然に現れるから怖いのでしょうか。

ところで、仏教は「さとった正しい眼でみれば、すべては実体がない」。そう、教えます。実体がないのだから、靈魂<sup>れいこん</sup>も存在しない。とはいしながら、生きている人はみな、死の未経験者だから、他者の死を見て、あれやこれやと想像するしかありません。

いずれにしても、お盆に帰つてくる祖靈<sup>が</sup>リアルかどうか悩んでいた女子高生へは、次のように言つてあげたい。

「目に見えない世界は、あるかもしれないし、ないかもしれない。確かにのは、靈魂やたたりを声高に叫んで不安をあおる宗教があるとすれば、危ないから近づいてはダメだよ」。

これで、納得してくれるかなー。



# 青春、ふたたび來たらば

鏡について書きます。とはいっても、私自身が鏡をよくのぞくかというと、あまり見ません。自慢するほどの容姿ではないし、なるべくなら見たたくない代物です。

でも、見たくないと言しながら、歩いていて窓ガラスにうつる自分の影を見つけてしまったときなど、やはり気になります。まわりに誰もいないのを確認してからポーズをきめて、わざわざと見ててしまうから、人間なんて何が本心なのかわかりません。

さて、この人はどんな気分で、鏡を見つめたのでしょうか。そして、すうひとつこの詩句が出てきたのだろうか。俳人・村上鬼城（一八六五～一九三八）の句です。

## けさ秋や見入る鏡に親の顔

今朝から秋になるのですから、今年でいえば八月七日。立秋の日の驚きでしょうか。人生の峠をこえて、これから下つていいく頃に、親のようになってきた自分に気づくのは、初秋がふさわしい。若い時は、鏡にうつるおのれの姿に、親の顔など見つけません。

見つけたとしても、そんなのは見なかつたことにしてしまいます。でも、青春をとり越して、人生の方向が見えてきたころには、親に似てきたという、いまいましい事実も受けいれられるようになるのでは。

ところで、青春なんて口にだすのは恥ずかしいけれど、あややかなことばです。禅の書物にもたまにでてきます。

たとえば、「白日（＝月日、時間）、空しく過ぐすことなけれ。青春、ふたたび来たらず（白日莫空過、青春不再來）」という唐詩の一節が、いつくかの語録に引用されています。気づいたころには通り過ぎている青春は、昔も今もかわりありませんし、春を形容する色に青を選んだセンスにびっくりします。

春だけでなく、四季に色をつけたのは古代中国人です。

夏は朱夏で、秋は白秋に冬は玄冬。<sup>（げんとう）</sup>そして、季節の変わり目の立春・立夏・立秋・立冬の前、十八日間を土用として黄色であらわしました。あわせて、青黄赤白黒です。

四季の移ろいを、人の一生になぞれば、まさしく人生の色であります。

立秋を過ぎると田遅れの八月盆。<sup>（しゃうりょうだい）</sup>精靈棚を彩る五色の千代紙は、人生の四季を教えているのかもしれない。俺は今、何色だらうか。鏡をのぞいてみるか！



## 秋の彼岸には……

アイドルグループ「嵐」が出演していた航空会社のテレビ「マーシャル」に、「光の道」をテーマにした映像がありました。「光の道」とは、福岡県北部に建つ宮地嶽神社の参道のことです。毎年、二月下旬と十月下旬の数日間だけ、神社と参道と玄界灘に沈む太陽が一直線に並び、参道が光り輝きます。その絶景を夕焼け色に染まったアイドルが見入る、という画面でした。

コマーシャル以後、観光客が嵐のように押しよせるとか。残念ながら私は、光の道は未経験ですが、他にも眺めてみたい夕日の絶景ポイントをあげれば、大阪四天王寺はいかが。

「なんだや、ビル街の夕日なんて、おもうないー」と反論されるかもしれません。でも、古い歴史をもつこの寺は、中世の頃まで大阪湾に没する太陽を見る絶好の場所だったといいます。聖徳太子も春分秋分の日の夕方、四天王寺の西門のまん中に落ちていく夕日を合掌してお拝まれたとのこと。実は春秋彼岸に、夕日を観察するのは物見遊山ではなく、きちんとした仏道修行なのです。『觀無量寿經』に、次のような一節が收められています。

「まず想像力を奮い起こし、正坐して西に向かい、じつと太陽を見つめるようにせ

よ。そして、心を固く定め思いを一つにして移さないようにして、太陽がまさに没しようとして、あたかも空中にかけられた太鼓のような形になつてゐるのを見よ」

（大乗仏典6『浄土三部經』中央公論社）

これは、「日想觀」といふ淨土教の修行で、お彼岸の起源のひとつに、この「行」があるのは確からしい。阿弥陀様がおられる西方淨土に沈む夕日をただ見るのですから、難しくはない。だれでもできそうだけれども、普通は長時間にわたり正座して日没を眺めないし、禅宗は建物の中で坐禅をするのが基本なので、明から暗への空気の流れを感じても、夕日は見ない。

禅とは縁遠い修行かといふと、「禪淨双修（禪と念佛の一とつを修める）」といふ言葉もあるし、臨濟宗で、お施餓鬼や葬儀の時によむ「往生呪」という経文（陀羅尼）は、冒頭で「南無阿彌陀婆耶」と阿弥陀様のお名前を唱えるから、禪も西方淨土と無縁ではないのです。

さて、上皇后陛下美智子様の歌集『瀬音』（大東出版社）に「移居」と題した歌があります。

三十余年君と過ごしこの御所に夕焼けの空見ゆる窓あり

平成五年の作だといふ。これも、「日想觀」ではないだろうか。



# だるま 達磨はなぜ東へ行つたのか

大本山妙心寺は京都にあります。千年の都を礼讃する書物を探すのは容易ですが、京都の悪口を正々堂々と書いた本となると少ないので、建築史家の井上章一氏の著作に、「京都ぎらい」（朝日新書）があります。井上氏は、妙心寺のすぐ南側で生まれ、数年前の妙心寺微笑会総会では記念講演をされています。さて、『京都ぎらい』に次のよつた逸話が紹介されています。

京都中心部の老舗の令嬢に縁談がもちこまれます。お相手の男性は山科に住んでいます。山科は東京から新幹線に乗れば、京都洛中へ通じる東山トンネルの直前で、大石内蔵助が討ち入りまで隠れ住んだ所でもあります。今では京都市山科区です。ご令嬢、いわく、「山科なんかいったら、東山が西の方に見えてしまつやないの」。

土地勘がないと、わかりにくいのですが、洛中からは東に見える山も、ひとやま越えて山科へ行ってしまえば、西に見えます。田がのぼる山が、田が沈む山になってしまつのです。このように、どうしても自分を中心いて見てしまつ我われです。

中心といえば、現代日本の中心は東京なので、東京発のニュースが多いから、ご気分をそこねて居る御仁もおられるでしょう。そうした方には耳障りな話題ですが、東京神田に岩波ホールという映画館がありました。大きくはないビルの十階にある、小さな

映画館でした。残念ながら、今年七月で閉館しました。「地味で野心的な映画」を上映するホールだったという。そんなところだから、映画通でもない私は一度しか足をふみいれなかったことがなかつた。平成三年の夏に、『達磨はなぜ東へ行つたか』という、韓国映画を観にいきました。韓国語の映画で監督も韓国人だから、日本語の字幕がついていました。客席には著名な仏教学者・中村元博士も座つておられたのを憶えています。山ふかい禅寺に暮らす、幼い小僧さんと青年僧、そして老いたお師匠さんの物語です。

禅の大きなテーマに「達磨はなぜ西からやって来た（祖師西来意）」があります。達磨大師（？～四九五）は実在した祖師で、南インド出身とも、イラン出身ともいわれます。碧い眼の渡来僧で禅宗の始祖です。その大師が「なぜ西からやって来たのか」という疑問は、「禅とはいつたい何なんだ」「わたしは何者なのだ」という問いかけにほかならない。

なのに、この映画は「なぜ東へ行つたのか」と、問い合わせる。古代中国人からすれば、西から来た碧眼の僧だけど、達磨大師ご自身は、イングから東方へ向かつたのです。西が東になり、東が西になるから、四角い頭をまるいく。達磨大師といえば、面壁九年の修行が有名だけど、堅い意志で柔らかな発想を。そう教えているのが禅ではないだろうか。

十月五日は達磨大師のお命日とされる達磨忌です。この頃を境に、日本の禅の修行道場では、せりせりの麻の衣かり、藍色の木綿衣に更衣えになります。秋です。



## 辞書を引きなさい

仏教書としては、空前のベストセラーを記録した『般若心経入門』（祥伝社）の著者であつた松原泰道師（一九〇七～一〇〇九）は生前、「辞書を引きなさい。辞書をみなさい」と、教え諭されたといつ。そのためか、百一歳で遷化（逝去）された師の四十九日忌法要には、参列者へ真新しい漢和辞典<sup>ゆいひん</sup>が遺品のひとつとして手渡された。

そんなきさつでいただいた辞書だから、使わなければと調べ物をしていた時だった。たまたま、「信条」という文字に目がいくと、こう書かれている。「信条＝信者に信仰させる教義」。宗教くささが気になって、もう少し大きな国語辞典で調べると、「キリスト教で、信仰の箇条」とある。何と、「信条」はキリスト教の用語だったのか！。妙心寺派には「一日一度は静かに坐つて（注<sup>一</sup>）」とはじまる昭和三十七年制定の「生活信条」があるではないか。驚いた次の瞬間、「ははーん、仕掛け人（非礼な言い方をお許しください）はあの方か」と思いいたる。

あの方とは、花園大学の学長を長年つとめられた山田無文元妙心寺派管長（一九〇〇～八八）である。ご著書『わが精神の故郷』（禅文化研究所）によれば、無文老師は愛知県に生まれ、若い日に法律家を目指して上京、早稲田中学へ進学する。しかし、「学校の授業中にもひそかに『法華経』や『歎異抄』やバイブルを読んでいるような生徒に

なつてしまい」、旧制高校の入学試験には不合格、あげくに結核で生死をさまよつたのち、出家得度。病身が完全に回復するまでの間、京都の臨済宗大学（現花園大学）で禅宗学を学ぶ。京都に出てからも「日曜日にはかならず、黒い衣ムクモノを着たまま教会へ通つた」というから、後に「信条」というキリスト教用語を使って禅宗教団の標語を作つたのは無文老師にちがいない。

私の勝手な推測を事実だと裏付けてくれたのは、季刊誌『禪文化』（一〇一五年四月号）に掲載された西村惠信花大名誉教授の「私の無文老師」と題した文章だつた。

昭和三十年代前半、花園大学の新任教員となつた西村先生は、「滋賀の自坊から京都駅に来て山陰本線に乗り換え、花園駅に向かう途上、しばしば神戸からやつてこられる無文老師と、車窓を共にすることがあつた」という。無文老師は神戸・祥福僧堂の師家シケでもあつた。

ある朝、「西村君、こんなもんじでどうじやろう」と見せられたのが、「生活信条」の素案だつた。老師は通勤の途上で、花園大学校歌も作詞され、生活信条も草案されたのだつた。そうした老師さまが、教団の標語にそつと隠した深い願いを、私に教えてくれたのは辞書でした。

（注1）生活信条全文

一日一度は静かに坐つて身と呼吸と心を調えましよう  
人間の尊さにめざめ自分の生活も他人の生活も大切にしましよう  
生かされている自分を感謝し報恩の行を積みましよう



# は ちよう 破 調 の ひと

令和四年のNHK大河ドラマは『鎌倉殿の13人』でした。ドラマの登場人物のひとりに、北条政子（一一五七～一二一五）がいます。夫の源頼朝亡きあと、尼将軍として君臨した強い女性の愛読書は、『貞觀政要』。この書物は、中国は唐朝（六一九～九〇七）の第二代皇帝の言葉を集めたものです。その中に、次のよつた一節があります。皇帝が問いかれます。「創業と維持のどちらがむずかしいか（草創と守成、いづれが難し）」。臣下のひとりが答えます。「起業よりも、事業を維持するほうが困難です（守成は則ち難し）」。

大河ドラマでいえば、頼朝が起こして政子が引きつぐのですから、守るしんどさは身に染みていたでしょう。だから、この一節を読んだ尼将軍は「そのとおり」とにんまりしたかも。

ところで、北条政子が没して五十余年後、信濃国で生誕したのが妙心寺開山・無相大師（一一七七～一二六〇）です。創めるのは守るより簡単、なんて言つたら叱られる。無相大師が開創した妙心寺は、花園法皇の離宮を禅寺とした粗末なものでしたし、それさえも応仁の乱に連座して取りつぶされてしまう。創めるのも、守るのも困難な歴史でした。

さて、開創以来の変遷のなかで、埋もれていたひとりの祖師に光りをあてた著書が昨秋、出版されました。藤田和敏著『悲劇の宗教家・前田誠節』（法藏館）です。幕末に生まれ、明治大正を生きた禅僧、前田誠節（一八四九—一九一〇）の周辺を明らかにした著作ですが、誠節師の生涯はそのまま、本の副題にあるように「臨済宗妙心寺派の近代史」でもあるのです。

この本は、妙心寺派現法務部長さまから頂戴しました。正直に白状すれば、いただいた本というのは、読まないことが多い。でも、これはひといきに読みきました。なぜなら、明治維新といつのは、まさしく狂乱の時代だったのですね。明治元年に神仏分離で仏僧の還俗と廢寺が奨励されたかと思うと、五年後には全国の僧侶と神職が国民教化を目的に無給の国家官吏に任命されるという、メチャクチャなあります。そんな中で誠節師が進めた宗派改革は強引と批判を浴び、教団の財産流用で有罪判決をうけ、失脚した破調の僧です。しかし、師は妙心寺入寺の儀式（＝視篆開堂）を行い、歴代の妙心寺住職に名を連ねる正調の禅僧でもあるのです。正と破の人だからこそ、現代へと続く礎になれたのではないか。

十一月十一日は妙心寺開山忌。この日、法堂では管長さまが冷たい敷き瓦に五体を投げ出し幾度も摔倒されます。開山さまへの報恩と伝灯を守っていく意志の証しではないでしょうか。



## 新しいカレンダー

新しい年のカレンダーを手にすると、真っ先に「ゴールデンウイークは何連休か。シルバーウィークはどんな様子だと、祝日の日並びを調べる御仁もおられるでしょ？」か。曜日関係なしに葬儀や法事が入る勤めがら、新しい年の休日探しの楽しみはあります。前世纪に生まれた時代遅れの人間には、祝日が変動するのがピッタリかもしれません。どうじうことかといふと、「敬老の日」は現在、九月の第三月曜日だけ、以前は九月十五日。十月十日だった「体育の日」は「スポーツの日」になつて、十月第一月曜日。そして、一月十五日だった「成人の日」が一月の第二月曜日、といつた具合に、曜日は定まつていても日には毎年変わります。

「それぞれには、歴史的な意味が込められていただらうに」、などといふ小言をなづげるつもりはないのですが、まだ成人の日が一月十五日だったころの、ちょっと良いけれど、すこし悲しい話を思い出しました。太郎君の成人式です。

太郎君は、車イスの生活です。生後六か月で手術した病気の後遺症で、歩けません。そんな彼にも、成人式の通知が市役所から届きました。バリアフリーとはいっても、市民ホールのどこにでも行けるわけではなく、晴着もありません。

彼は欠席して、ひとりで成人を祝うことになりました。それは、ずっとやつてみたい

と思つていたパチンコをすることでした。太郎君は駅前のパチンコ店に、車イスで入つていきました。しかし、パチンコ台の前には固定された椅子があつて、近づけません。かなしくなつて店を出ようとした時、店員さんが事務室から工具を持ってきて、一台の固定イスをはずしはじめたのです。数分で、車イス用のパチンコ台のできあがり。店員さんの教えるようやつてみましたが、財布の中の三千円は、すぐになくなつてしましました。でも、それだけでうれしかつた。

谷川俊太郎の詩集『魂のいちばんおいしいところ』（サンリオ）に、「成人の日に」という詩が収められています。その一節を引用してみましょうか。

どんな美しい記念の晴着も

どんな華やかなお祝いの花束も

それだけではきみをおとなにはしてくれない

他人のうちに自分と同じ美しさをみとめ

自分のうちに他人と同じ醜さをみとめ

古いカレンダーを何十回も新しいカレンダーに掛けかえて、年だけはかさねてきたけれど、おれは大人になつたのだろうか。



## 鬼のひそひそ話

一月の立春も近くなつて、少しばかり暖かい日のことでした。どうかうともなく、鬼のひそひそ話しが耳に入つてきました。赤鬼さんが青鬼さんにぼやきます。

「そろそろ、節分だね。われら鬼にとつては、受難の時が近づいてきた」

青鬼さんも、ためいきまじりにこたえます。

「いつもは、天井や床下に隠れていたり、人の心の奥深くにもぐり込んでいても見逃してくれるのに、どうして、この日に限つて豆を投げつけられるのだろうか」

学問好きの赤鬼さんは、口ごもるの勉強の成果を披露します。

「そもそも仏教では、時たま施餓鬼や施食会などといつ法要をして、われらはたくさんの食べ物をいただける。ましてや禪宗は、朝食と昼食には、〈もろもろの鬼神たちよ、お前たちにお供えを施そう（汝等鬼神衆、我今施汝供）〉と声にだして唱えて、数粒の米をわけてくれる。なのに、一年一度追いだそつとるのは筋がとおらないね。でも、道理をわきまえているお寺もあるよ。千葉県の成田山新勝寺では、〈鬼は外〉とは言わずに〈福は内〉だけを連呼するんだつて。鬼を嫌つて追い立てるだけでは、どうかへ行つてまた悪事を働くかもしない。鬼も福にかえてしまつのが、成田山のご本尊さま、不動明王のお慈悲だから（注一）」

静かにうなずいていた青鬼さんも、だんだんと怒りがこみあげてきました。

「無慈悲で冷たい奴といえど、桃太郎は鬼の宿敵だね。腰につけたキビ団子でイヌ、サル、キジを誘惑して、鬼ヶ島を攻めたのだから。あそこにあった財宝は鬼が苦労して集めたお宝だよ」

だれもが知っている童話に誘われて、赤鬼さんがまたまた博識ぶりをひけらかします。

「桃太郎のことは、福沢諭吉先生も『ひびのしえ』という本で、「もゝたらぶが、おにがしまにゆきしは、けしからぬことならずや。ぬすびとゝもいふべき、わるものなり」と、書いておられたよ（注<sup>2</sup>）」

諭吉翁は「桃太郎は善、鬼は悪と思いこんでいる常識を疑つて自分で考えてみろ」と、おっしゃつているのだろうか。禪にも、「大疑の下に大悟あり」の言葉があります。さて、鬼のひそひそ話はこのくらじにして、一月十五日は釈尊入滅の涅槃会です。釈尊最期の言葉、「自らを灯とせよ（自灯明）」も、「身を削つてまわりを明るくするるうそくのように、常識にとらわれないで、みずから行く手は自分で照らせ」。そう、教えてじるのでしょうか。

（注<sup>1</sup>） 中村元編著『仏教行事散策』（東京書籍）

（注<sup>2</sup>） 福沢諭吉著・岩崎弘訳『童蒙おしえ草 ひびのおしえ』（角川ソフィア文庫）



## 花は合掌に開く

毎朝、テレビ体操をします。固くて曲がらないわが関節は別にして、テレビを見ていで気になることがあります。映像と同時に、体操のしかたを言葉で説明してくれるのですが、これがわかりにくい。

たとえば、「腕の外まわし、内まわし」とか、「首を横曲げ、左右にねじって」。外と内つてどっちだよ。曲げるとねじるはどうちがうんだ。画面があるから理解できるけれど、言葉では説き明かしにくいのが身体の動作です。などと、番組への不満を言っているわけではなく、詩歌で恋愛の気分は伝えられても、身体の動きを説明しようとすると言葉は不自由です。

ここで、クイズです。次にあげるのは、仏教の重要な動作をしめしたものです。何の所作を教えていいでしようか。

「互いの指を交叉してはならない。胸の前に高からず低からず所を得て當てん」「

合掌の仕方です。江戸時代は妙心寺の学僧、無著道忠禪師（一六五三～一七四四）が著した、『禅林象器箋』にある記述です。現代語訳は西村惠信著『禅林象器箋抄訳』（禅文化研究所）からお借りしました。道忠禪師はいくつかの書物を引用して、言葉では説明するのが難しい合掌を、「必ず指も掌（たなじだら）も相（あわ）じ着けて間を空虚にしない

よつ」と教えています。

だが、しかし。手のひらを合わせられない場合もあります。ずいぶん前になるけれど、十名ほどの若者と坐禅をし、その後、読経したときのことです。離れたところで坐っているひとりが、手を合わせません。注意の言葉が出かかります。しかし、〈まあ、いいか〉と、思い直して声になる寸前だった言葉をのみこみました。

坐禅と読経と法話が終わり、部屋からでていく男らを見送りました。手を合わせなかつた若者の後ろ姿をみると、彼の腕は感覚がなく不自由なのがわかります。數十分前にそんな彼に、「合掌しなさい」と叱咤とした言葉が冷たく喉に突き刺さります。若者の顔は忘れたけれど、冬の寒い日だったことだけは覚えていました。十人ほどの若い男と、いつしょに坐つたのは、少年刑務所の仏間でした。ハンディキャップを抱えた彼は受刑者で、私は教誨師でした。

菅原道真（八四五～九〇三）がよんだ漢詩の一節に、「花は合掌に開けて春に因らず」があります。春がきたから花が開くのではなく合掌した手に花は咲く。道真は流罪者として生涯を終えます。少年刑務所のあの若者に花は開いただろうか。そして私は今、しっかりと手を合わせているだろうか。

花は春によりうす

令和5年春彼岸



Iwasaki Noriko photo

令和5年春彼岸 私家版発行

埼玉県熊谷市本石 1-102

臨済宗妙心寺派 松岩寺

花岡博芳